第二言語学習のアプローチ：新しいパラダイム

谷川　幹

桐蔭横浜大学工学部・医用工学部

（2008年3月15日　受理）

はじめに

第二言語学習者は、読む・書く・聞く・話す、の四つの技能の習得を試みようとする。近年、発信型の外国語能力に対する社会的要請が高まる中で、日本語母語話者の「書く」「話す」の技能の向上が英語教育の現場で課題となっている。

そのような社会的な要請もあり、話したり書いたりという能動的な語学運用能力はどのようにして養われるのかについて、国内外で活発な研究や議論が行われている。

一方で、これまでの学習理論やアプローチ研究は初学者が如何にして発話能力の面において中級レベルに進むことができるかという観点から展開されており、理論の上からは学習者が継続的・発展的に第二言語（L2）の能力をいかに発展させるかの展望を必ずしも描くことができないように思われる。[1)]

また学習方法論の観点からも能動的語学力の中心的焦点である表現力の継続的発展を促すような効果的な学習方法が必ずしも見出されていないと思われる。

本稿ではこうした問題意識に立脚し、語学の能動的な運用能力を養う方法論には二つの大きなアプローチが存在することを示し、提出されている様々な学習理論をこのパラダイムに当てはめることを試みたい。このパラダイムの有用性は様々な学習理論を横断的に眺め、整理することを可能にすることにあり、これを例示的に示したい。

提示する二つの学習アプローチのうちの一つ「パッチワーク式」学習法については最も典型的な学習方法の一つである「コンテクスト・フィッティング」を提唱すると共に、同アプローチを具体的に例示・記述したい。同学習法は特に中・上級者に向いており、日本の教養人に多く見られる「読解力は最上級であるが、発話力は初級又は中級レベル」という学習者に適している。

これまでの内外のL2の発話能力育成に関する学習理論では、学習者が「理解」の範囲を超えて「発話」するに至る過程で経験する大きな壁についての認識・分析が不足しており、またそれを乗り越えるための方法論や展望が欠けていることを指摘したい。パッチワーク式のアプローチがこの問題に挑戦する一つの鍵を提供すると筆者は考えている。尚、本論では「英語」をL2の例として取り上げるため日本語母語話者にとっての「外国語」を「英語」と置き換えて、論を展開する。また、

Miki Tanikawa: Faculty of Engineering/Faculty of Biomedical Engineering, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aoba-ku, Yokohama 225-8502

後段の提唱理論（「後にコンテクスト・フィッティング」と呼ぶ学習方法）については現段階では実証的・実験的なデータを伴わない試論であることを断わっておきたい。

1.「文法アプローチ」と「パッチワーク式」学習法――表現能力向上の方法論のパラダイム

1.1　能動的言語力と受動的言語力

本題のパラダイムを説明する前に、このパラダイムが主眼とする英語表現力が総合的な英語力の観点からどのように切り分けられるかについて考察したい。

言語能力は「読む」「聞く」などの受動的な側面と「話す」「書く」などの能動的な側面がある。（一方で、「聞く・話す」の音声言語に関わる領域と「読む・書く」という文字言語に関わる領域に分類することもできる。）これらの四つの側面は分離独立した別個のものと扱うことはできず、相互に補完的な関係を持っている。従って本来的にはこれらの四つの技能をバランスよく発展させることが肝要である。「読む」ことが書く能力の向上に繋がり、また「書く」ことが話す能力にも繋がり、また、「聞いた」ことが読んだり書いたりする知識に役に立つこともある。しかし、受動的な側面の学習に注力する傾向が顕著な日本の英語教育環境下にあっては、発話的能力の形成がその他の側面と比べて著しく遅行する傾向がある。つまり現実には「書く・話す」の表現的英語力は「読む・聞く」（特に読む能力）の受容的英語力と比べて著しく劣っており、著しくバランスが欠如している状態にあると言って良いだろう。学校教育を終えたあともこのアンバランスな状態は継続しており、日本の教養人の多くは「読解力は最上級、発話能力は初・中級レベル」の状態にあるといっても過言ではないだろう。

能動的な英語力を発展的・継続的に伸ばす学習方法を検討するにあたって、次の理論的な枠組みが有効なフレームワークを提供してくれる。

2.「パッチワーク式」と「文法アプローチ」（または規則アプローチ）――表現能力向上の方法論のパラダイム

2.1　英語の表現能力を向上させる学習アプローチには次の二つの考え方・立場がある。

（1）文法アプローチ――演繹的方法

文章を構築するための規則、即ち文法や構文の知識を習得し、それに沿って単語の配列を行い文を作っていく手法である。（一部の英語教育者は翻訳法と呼んでいるようである。）また、そのような手法で英語表現能力を向上させることが可能であるとする立場である。この立場に立てば、文法的な原理と構文の理解があれば語彙知識を拡大させることで、英語表現力は向上すると仮定することになる。一般的な公理（即ち文法）に基づいて個別具体的な適用（即ち文章作成）を行い、それを基に体系を築きあげる営みという点において、演繹的な方法ということができる。

文法アプローチと呼びながらも必ずしも「文法」のみを拠り所とするのではなく、構文や統語規則などことばを操るルールや規則を基に文を形成することが可能であるとする考え方である。その意味では規則アプローチと表現することも可能であろう。

（2）パッチワーク式学習法――帰納的方法

この方法は、ありとあらゆる英語表現に触れ、それらのひとつひとつを理解・吸収することを通じて英語表現力を伸ばそうとするアプローチである。このアプローチによると、英語表現はそれぞれが当てはまる適切な文脈があり、学習者はそれぞれの場面で適切な言葉や表現を吸収する必要があると考える。場面に応じた適切表現の積み重ねの総体が目標

とされる英語力であるとする。一つ一つの言葉や表現を積み重ねること（パッチワーク）で英語表現力という総体を築き上げるイメージから、このように命名した。文法の知識・理解があることを前提とするが、文法の原理から正しい文を導く方法（即ち演繹的方法）に依存しないことが大きな特徴である。

一方でパッチワーク式学習法は一つ一つの正しい表現を場面ごとに積み重ねることで言葉の組み合わせ方に関する一般的原則と感覚を習得し、それをバネにして更なる表現力の向上を目指すものである。最終的には母語話者に近い言語直感を養成することを目標とする。知識の積み上げを通じて文章構築の原理や直感を習得する…即ち個別具体的な事例の積み重ねを通じて一般的な原則を導く…という点においては帰納的なアプローチということができる。

2.2 既存理論・先行研究との関係

ここで上記のパラダイムとL2学習の先行的研究理論との関係が問題になろう。L2学習に関して、対照的・対立的なパラダイムとしてはR.Ellisなどに代表される文法アプローチとS.Krashenのナチュラルアプローチがある。Ellisは文法規則に関する知識を明示的に与えることを通じて学習者はL2を習得しうるという学習観に立っており、ファンダメンタル（基礎的な）部分において上記の対立パラダイムの一つである「文法アプローチ」と一致する。（但し、Ellisの文法アプローチは多くの他の競合理論と同じように初学者即ち[発話能力が無い者]が如何にして、中級レベルに進むことができるのかという「言語習得」の観点からの理論である。言い換えるならば、Ellisの理論は「第二言語習得理論」であり、「向上理論」ではない。）

一方で、Ellisの「文法アプローチ」と対比される「ナチュラルアプローチ」は上記パラダイムにおける「パッチワーク式」とは視点やカバーしている理論領域が異なる。ナチュラルアプローチとは学習者がネイティブスピーカーが発する自然なことばに広く遍く触れることで発話能力が自然に養われるとする立場である。「パッチワーク式」学習法は必ずしも自然なexposure（露出）に任せるのではなく、意図的に選択した表現を集中的に学習することも含むアプローチである。必要な表現をひとつひとつ積み上げていくというアプローチなので、使用頻度が高いものから学習することが望ましく、またそのような観点から教材選択をした場合においては必ずしも自然なアプローチではない。また、本稿でも述べる「パッチワーク式」に分類される典型的な学習方法である「コンテクストフィッティング」においてはインプットされた言語表現はコンテクストフィッティングという明示的で意図的なエクササイズによって習得される（使えるようになる）と説いており、自然なインプットを重視するナチュラルアプローチの方法論と一致しない。

「総体」を築くというイメージからは、あらゆる英語表現に満遍なく接する必要はあるが、学習者にとってよりニーズが高い表現を集中的に学習することはパッチワーク式の学習アプローチの趣旨に反しない。つまり学習者が必要としている分野の英語力、例えば接客や営業の場面を想定してのパッチワーク式の学習もありうる。

但し、「文法アプローチ」対「パッチワーク式」という広い図式に当てはめれば、ナチュラルアプローチは一つ一つの英語表現を拾い上げていくインプット重視の学習方法なので、後者に属することになる。言い換えると「ナチュラルアプローチ≠パッチワーク式」であるが、広い視点からは「ナチュラルアプローチ＜パッチワーク式」ということになる。

2.3 パラダイムの適用—学習法・学習理論の分類

一般に知られている英語学習法・学習理論の多くは上記のパラダイム（＝二つのアプローチ）に当てはめることが可能である。以下、学習理論の幾つかを取り上げ、実例的に「文法アプローチ」「パッチワーク式」のいずれかに分類をし、パラダイムの適用を試みたい。

① 義務教育における英語学習のアプローチについて

初めに、具体的なテキストは挙げないが日本の中学・高等学校の義務教育で実施されてきた伝統的な英語の指導法は「文法アプローチ」に属している。指導要領において段階的に設定された文法項目を中心にして学習計画が組み立てられており、英語を理解する基礎としての文法を絶対視している。英作文など英語表現を行うエクササイズにおいても文法の知識の定着を図る学習と位置付けられている。一方で文法学習の偏重が批判される中で、近年導入された「コミュニカティブアプローチ」は「パッチワーク式」の学習観に立脚している。同アプローチは一つ一つの英語表現を積み重ねることで英語による意思疎通ができるようになると仮定しているからである。

② 斉藤兆史（2007）『英文法の論理』（東京：日本放送出版協会）

近年のコミュニケーション重視の英語教育に対して、英語を論理的に学ぶことの必要性を説く論者が現れてきた。斉藤（2007）は英語学習者には文を構築するための文法の理解と受容こそが重要と説いている。本書のカバーには「コミュニケーション重視の英語教育が持て囃され、感覚で学ぶ英文法書が巷で溢れている。しかし、英語というロジカルな言語を習得するには言語や思考力の基礎となる文法の理解こそが早道だ」とある。本書は初学者向けに書かれたものであるが、高度な英語力を目指す前提として、基礎としての英文法力は欠かせないものであり、「高度な英語が操れるようになるには、どうしても英文法を頭で、理詰めで覚えなければならない。」としている。（まえがき、p.9.）文法思考の強い発想で貫かれた書である。

③ 森沢洋介（2006）『どんどん話すための瞬間英作文トレーニング』（東京：ベル出版）

基礎的英語学習者の間でベストセラーになった本書はCDを通じて聞いた日本語を元に英作文を行う練習ができるように構成されている。英文を構築するためのルールを明示的に教えることよりも、基礎的な英文を即座にどんどん書かせることによって英文構築力を養うということに重点を置いている。様々な文の実践によって作文の感覚を養うものであるから「パッチワーク式」の学習観に立っているアプローチと言えよう。

④ 橋内武（1995）『パラグラフライティング入門』（東京：研究社出版）

英作文をパラグラフ構築の観点から解説した良書で、学習者のみならず研究者の間でも（指導書として）評価が高い。あるまとまった考えをワンパラグラフ（100字程度）で表現する為の作法を全体の構成、センテンス間のつなぎ方、ことばの配置や例示、対比、繰り返しなどの文章技巧を解説している。

文法そのものを教授する内容は見当たらないが、文章を書く際の基本ルールの指導を中心としていることから本書は「文法アプローチ」と捉えることができよう。（2. で示したように、「文法アプローチ」とは規則をベースにした考え方である。）本書では英語のことばや表現を記憶するという視点は見当たらない。

作者自身も認めているように、同書の指導要領は英作文に限定されず、日本語の文章作法にも当てはまるものである。[2)]

⑤　その他

ー野口悠紀雄（2000）『超勉強法』（東京：講談社）
ー酒井那秀・神田みなみ（2005）『教室で読む英語100万語 - 多読授業のすすめ』（東京：大修館書店）
ー石山宏一・岩津圭介（2007）『ジャンル別トレンド日米表現辞典』第4版（東京：小学館）

その他「ネイティブがよく使う英語フレーズ500」などのように有用な英単語やフレーズを紹介する本はパッチワーク式の学習観に依拠していると考えられる。また、英語力を伸ばす為に、英文を丸暗記することを勧めている論者もいる。野口（2000）が良い例であろう。文は沢山のことばから成り立っているが、丸暗記をすることでことばとことばのつながり（連語関係）を理解し、正しい表現の仕方が身につくという主張は、パッチワーク式学習法の考えに沿ったものである。また、最近一般的な英語学習教材として利用されているもので「多読」という考え方が広まりつつある。これもパッチワーク式の考え方に属するものと言えよう。（酒井・神田　2005）[3]

また、辞書の形式をとりながらも、使い手が意味を手がかりに必要な語彙を探し出すことを旨として編成されているものは文法アプローチの発想に基づくものと解釈できる。石山・岩津（2007）がこれに当たる。これが文法アプローチに該当するのは、学習者が必要な英語表現を見つけることができれば、既に持っている文章構築能力、即ち文法力との組み合わせで正しい英文を作成できると仮定していることになるからである。

当然ながら学習者が本書の単語を一つ一つ学習・吸収していくアプローチを採るならパッチワーク式の方法を採っていることになる。

3.　パッチワーク式学習法の具体例としての「コンテクスト・フィッティング」について

本項ではパッチワーク式学習法の実例として「コンテクスト・フィッティング」という学習法を紹介する。パッチワーク式のアプローチの実例として紹介することが主な目的なので、誌面の都合もあり当学習法の全容を明らかにすることができないが、この学習法の基本的な考えを具体例を通じて明らかにしたい。

尚、前項で明らかにした「文法アプローチ」と「パッチワーク式」のアプローチの内、筆者は「パッチワーク式」の立場・考え方に立っており、本項ではその観点から論を進めたい。

3.1 パッチワーク式学習法の有効性

学習者が初級の段階においては「文法アプローチ」はL2の習得に有効に作用する側面がある。発話（又は作文）の基盤が皆無の状態では、学習者は依存することのできる何らかの規則がなければことばを繋いで文をつくることは難しい。これは道具を与えられても使い方がわからないことに等しい。しかし、基礎的な文法のレベルを一旦クリアしたなら、文法原理にのみに依拠して表現能力を発展させることは困難である。これはことばの繋がりやセンテンスの構築の仕方、さらにパラグラフの組み合わせ方や文全体の編成に至るまであらゆる次元について当てはまる。文章は文法的な規範によってのみ制御されている部分は限定されているからである。

この点に関しては、文法事項を学習者に明示的に教示した場合と暗示的に教示した場合とでは学習効果にどのような違いが生じるかについて、Robinson（1996）の行った研究が示唆的である。より簡易な文法項目については前者の手法がより効果を上げたのに対して、難易度の高い文法事項に関しては、両群には違いが見られなかった、との報告をして

いる。

同研究が示唆しているところは、L2のより発展的な学習においては文法事項が言語表現の向上をサポートすることに限界があることを示している。Robinsonの研究における被験者は英語の「学習者」であり、英語を教室で学習しない上級者においては文法が表現力向上に貢献する度合いは更に低下すると考えられる。

逸話的な観点から見ても、日本語の母語話者が書いた英文はかなりの上級者であっても、言葉の使い方や文の接合の仕方などについて不自然な要素が多くみられる。英語らしい自然な文を書くようになるには（或いは会話ができるようになるには）ネイティブスピーカーが書いた表現を一つ一つ吸収し、積み上げて行くパッチワーク式の勉強が望ましい。

初学者は得てして表現能力が不足しているため、多くの場合、自分で推測をしながら文章を書いていかなければならず、その意味では必然的に文法アプローチに依存する場面があろう。いずれ正しい英語表現を身に付けるまでの暫定的な局面として文法を参照する必要はあるだろう。その意味では発展的な学習をする者にとっては文法アプローチはパッチワーク式の学習を補完する役割を持つと言えよう。

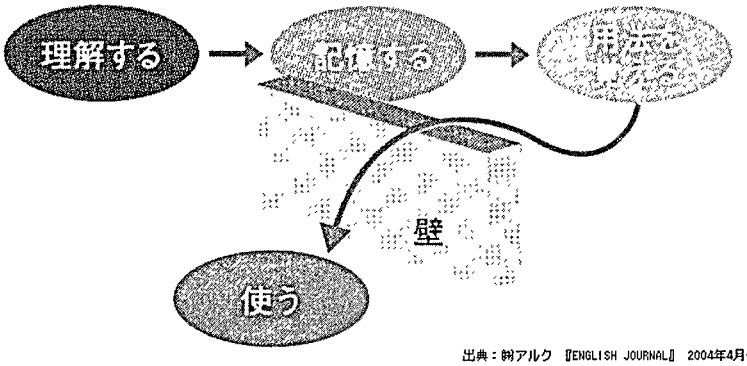
3.2 「コンテクスト・フィッティング」－具体的な学習の進め方

L2学習者が英語表現力を向上させにあたっての大きな課題は受容語彙をどのようにして使用語彙にするかである。つまり、どのようにすれば学習した語彙が理解の次元を超えて使用できる状態になるのかである。英語学習の多くは「使用する」能力を養っているつもりでも、依然「理解する」「記憶する」エクササイズに留まっていることが多い。英語学習には「理解する」「記憶する」「用法を覚える」「実際に使う」という四つの段階がある。[4] ことばを理解し、記憶し、用法を覚えても、必ずしも「使用する」に至らない。理解し記憶した言葉や表現を使用するに至る過程で立ちはだかる壁が存在し、それを乗り越えるような訓練が必要であることになる。

「コンテクスト・フィッティング」の学習法の考え方を示す為に、簡単な例から始めたい。

例えば、“After you.”（お先にどうぞ）という英語表現に遭遇し、その意味を辞書で確認したとする。この段階では“After you”を「受容語彙」として取り入れたに過ぎない。

【図:英語学習の4段階】



出典：㈱アルク『ENGLISH JOURNAL』2004年4月号

そこでこれを実際に使う場面を頭の中で想像する。例えば、英語話者にドアを譲る場面を想像して、“After you.” と話かけるところを想像するのである。After you は相手に順番を譲る時にはほぼどんな場面でも使うことができる。（ことばはどのように使われているかの用例についてはインタネットで検索をしてみると良い。）

例えば食事のテーブルで自分がバターに手を伸ばした瞬間に相手の手がバターの方に向かったとする。このような場面でもまた“after you” と発話する想像をする。

理解したことばが使えるようになるには、実際に使ってみることが大事であるが、学習者は学んだことばに学んだのと全く同じ場面で遭遇することはあまりない。又、遭遇したとしても必ずしも思いつかないものである。（これは文章を書いていても同じである。）これでは実際に「使う」機会を得ることが少ない。
頭の中のシュミレーションを通じてことばを様々な場面で当てはめて使ってみることが、現実にその場面に遭遇した時に使えるようになる為の潤滑油のような働きをする。

次にやや上級向けの単語を使って説明したい。Chemistry は「化学」を意味するが、他に「相性」という意味がある。人と人或いは人と組織の相性を指すことが多い。Chemistry をインターネットで検索すると、“The perfect job isn't perfect if the chemistry isn't right.” などの用例が出てくる。これを参考にして chemistry を使いうる他の場面を想像する。例えば、A さんと B さんが何故仲が悪いのか C さんに聞かれるといった場面を思い浮かべる。そこで The chemistry isn't right (between A and B) と答えるところを想像する。

このようにその単語を使った発話場面を想像することで、知識が文脈化され、現実に使用可能な場面に遭遇した時に口をついて出てくる可能性が高まるのである。

—構文の習得

単語やフレーズだけではなく、構文の理解・吸収もコンテクストフィッティングによって定着を図る学習が有効である。次の例文を見て頂きたい。

April marks the fourth year since the government introduced a nursing care scheme aimed at addressing the problems stemming from rapidly aging population.

これは日本の介護医療システムが導入後4年経った現状を述べた文であるが、簡単なようでこれだけの文を適切な場面で構築できるのは表現力上級者である。このレベルの文を書けるようになるためには、最初のステップとして文章の暗記を行う。文章を丸暗記して、いつでも復唱できるぐらいになっても、まったく同じ文を使う場面に出くわすことは稀である。また、そのような場面に遭遇しても、それを思いつくかどうか疑問である。そこでこの文を様々な場面で応用できるようにするために、単語又は句、節のレベルで置き換えを行い違う内容の文章を作る練習をする。

例えば、主語の April に換えて年（例えば“this year”）を入れたり、日付を入れたりする。その他に since 以下の government に換えて “our company” を入れたり、それにあわせて他の語も組み換えをする。すると例えば次のような文ができあがる。

—新しい文
This year marks the fifth year since our company introduced a maternity leave system that addresses the needs of male employees who wish to take a leave and return to their jobs later.

—元の文
April marks the fourth year since the government introduced a nursing care scheme aimed at addressing the problems stemming from rapidly aging population.

このようなエクササイズをすることによって、構文の「型」が頭に入り、意図した事柄をその構文の枠組みで表現する訓練ができる。一般に構文の中のことばを入れ替える学習は「定型構文練習」と言われているが、ここではコンテクストフィッティングの考え方に沿って、単にことばを入れ替えるのではなく、意図したことを表現する為にことばを換えるという意識が大切である。また、文章を丸暗記することでことばの連語関係が学習される。

文の暗記と単語の入れ換えエクササイズを通じて習得することが出来る英語の要素を以下に挙げると：

（1）This year 或いは April、のように主語に時間を表す名詞を置いて mark と言う動詞で受ける組み合わせが学習できる。ここから更に時間の概念以外の名詞、例えば“ Mr.Y's return to politics”（Y 氏の政界復帰）のような言葉も mark の主語として置くことが可能であるという理解に発展できる。

（2）scheme aimed at….という言い回し（元の文）から、介護の仕組みを scheme と英語で表現することを学んでいる。また scheme と aimed at という自動詞との連動性・親和性が学習される。更に“scheme aimed at”で「——を狙った仕組み、システム」を意味する表現として使うことができることが学習される。

（3）problems stemming from の言い回し（元の文）も重要である。「——から発生する問題」を英語で表現しており、problem と stem from の二つの語の親和性が高いことが学習される。この組み合わせに初めて遭遇した学習者は一度には理解するに至らないと思われるが、problems stemming from や issues stemming from 或いは questions stemming from などの類似した言い方に触れれば、stem from が問題や疑問を表す名詞との親和性が高いことが学習されていくと考えられる。このように名詞と動詞あるいは動詞とそれを修飾する副詞など、どのような言葉の間で親和性が高いのかは（つまり連語関係）、文法アプローチだけでは習得することは困難であろう。

（4）ことばとことばの親和性の観点では rapidly と aging の組み合わせも重要である。「急速に高齢化する」という意味であるが、rapidly が更に他の被修飾語、特に ing 形の形容詞と組み合わされることが多いことについての理解に発展することが期待される。（例えば rapidly growing, rapidly deteriorating などの言い方）

3.3　教材選択の問題

英語表現力の向上に取り組むにあたって、学習する教材のレベルの選択の問題がある。英語の語彙力や読解力が一定レベルに到達している学習者は学習教材として英字新聞などの上級者向きの教材を選択する傾向があるので特に注意が必要である。表現力の向上（即ち能動的な語学力）を目指すのであれば、教材選択をする際に学習者の受容語彙のレベル（読解力のレベル）に合わせるのではなく、使用語彙のレベル（正しく使うことが出来ることば）に合わせる必要がある。かなり基礎的

な表現や構文（例えば“after you”や上記の定型構文）が使いこなせていない学習者が受容語彙にあわせた教材選択をすると、身の丈に合わない学習をしていることになる。[5)]

日本では読解力において再上級のレベルにあるが、表現力においては初級のレベルを脱していない学習者が多いことを考えると、受容語彙と使用語彙の間には多くの落差があり、使用語彙のレベルに合わせたならば、受容語彙よりはかなりレベルを落としたものを教材として選択することになる。

3.4 コンテクスト・フィッティングの効用

コンテクスト・フィッティングのエクササイズの効用は以下のように纏めることができよう。

文章を単に丸暗記しただけの場合と違って、言葉を入れ替え、学習者が思い描いている状況に当てはめようと現実に応用することに努める結果、ことばや文章が頭の中で文脈化することを促している。文や表現は記憶しても、それを現実的に活かせる場面で思い出せなければ無意味である。コンテクスト・フィッティングは言葉を入れ替え、様々な場面に当てはめることで擬似的にことばを使用する体験をしているので、知識が利用可能なレベルに昇華されるのである。

コンテクスト・フィッティングは理解していることばを使える状態にする為の学習であるが、パッチワーク式のアプローチのすべてがそうであるように相当の数の英語表現を吸収しなければならない。単語レベル、連語レベル、構文レベルの練習を含めれば、何千何万という単語やフレーズや文を学習することになり、途方もない勉強量が必要になる。但し、3.2の定型構文の箇所で示したように、ことばの繋がりなどの一般的なルールや直感が養われるため、学習を進めるに従って、直感や経験が助けとなって表現力が加速度的に向上していくと思われる。[6)]

3.5 結論

本項3. の結論を纏めると以下の3点に集約することができる。

（1）学習アプローチを明確にするために、能動的英語力（表現能力）と受動的英語力（読解力と聴解力）を区別し、教材選択を含めて能動的な英語力の養成をめざした学習戦略を立てることが必要である。日本人の多くの英語学習者は発話能力の向上をめざしていても、実際は理解力を向上させるような受動的な学習に終わっていることが多い。

（2）総合的な英語表現力の向上を図るには一つ一つの言葉・表現を理解・吸収して積み上げていく「パッチワーク式」が望ましい。文法などの規則を理解した上で、言葉をルールに則って組み合わせて文を作る「文法アプローチ」は初歩的なレベルの学習者には適しているものの、一定レベル以上の表現能力を養うには限界がある。

（3）言葉や表現の習得に関して、「理解」のレベルを超えて「発表」するレベルに到達するには様々なシュミレーション手法を採用することが効果的である。単なる暗記では現実にその言葉を使うに相応しい場面に遭遇しても、頭に思い浮かぶかどうか疑問である。現実的な場面をシュミレーションする訓練を通じて「理解」している次元から「使える」次元への移行することが可能となる。

結語

冒頭で記したように、本稿には二つの目的があった。一つはL2の学習法を整理・統合するパラダイムとして「文法アプローチ」と「パッチワーク式学習法」の枠組みを提示することと、パッチワーク式学習法の一つの実例として「コンテクスト・フィッティング」を紹介することである。

前者については2. で示したように、既存の学習理論を整理・分類するパラダイムとして有効に機能するフレームワークであると考えられる。L2の能力を育成するには両方のアプローチが相互補完的に作用することが必要であるが、当パラダイムはそれぞれの欠点や補完項目を明確化することを可能にすると思われる。

パッチワーク式の学習方法の典型として位置づけた「コンテクスト・フィッティング」は理解語彙を使用語彙に高める為の学習方法として筆者が考案、実践してきたものである。学習方法の全容を本稿で紹介することはできないが、基本的な考え方は明らかにすることができたと考えている。

日本の英語学習者は概ね英語の理解能力を発展することには成功しているが、発話能力の開発は不十分であるとの認識が一般的である。従って、理解能力をどのように発話する能力に転換するかが課題である。コンテクスト・フィッティングはその為の鍵を提供すると考えている。本稿でも記したように、筆者が特に気がかりなのは発話能力を伸ばしたいと考えている学習者が使用語彙に合わせた学習をするのではなく、理解語彙の周辺レベルの教材選択をする傾向があることである。

今後の課題としては、当学習法を実証的に検証する方法を考案し、実験や実証データによってその効果を明らかにすることであろう。今後の継続研究に委ねたい。

1) L2学習理論は過去数十年に研究が活発化した分野であり、海外における萌芽的な研究理論に反応する形で日本でも精力的に研究が行われている。その中でもS.Krashenのインプット仮説, R.Ellisの文法アプローチ、M.Longのインタラクション仮説、M.Swainのアウトプット仮説などが基礎理論として良く知られ、L2学習論の基礎的、土台的な理論を形成している。

2) 同作者は「パラグラに焦点を当てた言語学習法は日本語の作文や小論文にも使える」としている。(同　はしがき、p.iv)

3) 「多読」を推奨する本として、酒井那秀・神田みなみ（2005)『教室で読む英語100万語―多読授業のすすめ』(東京：大修館書店）が挙げられる。

4) 谷川幹　(2004)「知っている英語を使える英語に―英語学習の4段階」『月刊イングリッシュジャーナル』 2004年4月号　p.18

5) 3.2で紹介した例文は高校生レベルの英語力のある人なら十分理解できる。従って、読解力の上級者はこのようなレベルの文章では勉強にならないと感じるかもしれない。この文は接続詞や関係代名詞（省略）の使い方が適切であり、また、動名詞を用いて複数の節や句を上手につないでおり、これだけの文を書ける人はかなりの上級者である。日本の多くの英語学習者にとってはこのレベルの英文を書くことは、かなりハードルの高い作業である。

6) この点に関しては筆者はチョムスキーの「普遍文法」論はL2学習者にも当てはまると考えている。つまり、L2学習者はすべてのことばの組み合わせの理論的な可能性を試さなくても、パッチワーク式の練習を通じて、言語直感が養われ（つまりすべての学習者が生得的に持っている普遍的な文法能力が呼び覚まされて）正しい文法で言語の表現ができるよ

うになると考えている。

参考文献(本文又は注で引用した文献は省略した)

Ellis, Rod (1997) *Second Language Acquisition,* London: Oxford University Press.

Krashen, Stephen D. & Terrell, Tracy D. (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom.* Oxford: Pergamon Press.

Long, M. (1996) The role of the linguistic environment in second language acquisition, in Ritchie, W.C. & Bhatia, T.K. (eds.) *Handbook of Second Language Acquisition,* Academic Press.

Swain, M (1998) Focus on Form in *Classroom Second Language Acquisition,* Cambridge University Press.

小池生夫他編 (2004)『第二言語習得研究の現在—これからの外国語教育への視点』(東京：大修館書店)

JACET SLA 研究会 編著 (2005年)『文献から見る 第二言語習得研究』(東京：開拓社)

野口悠紀雄 (2000)『超勉強法』(東京:講談社)

酒井那秀・神田みなみ (2005)『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ』(東京:大修館書店)

石山宏一・岩津圭介 (2007)『ジャンル別トレンド日米表現辞典』第4版 (東京：小学館)